



町民文芸

只見短歌会

一月詠草

大塚栄一

指導

馬場 八智

大半は一日を黙して過す我れ友の電話にこころ和めり

飯島小百合

快晴に四羽の鳥が円を書き追いかけてこ飽かず見上ぐる

関谷登美子

懐かしき旧知同期の集いあり互いに近況交わし和みぬ

新国由紀子

何してる早く寝るとふ老い母に夜半に作りし料理を運ぶ

目黒 富子

かじかみし幼の両手我の手でつつめば涙の顔がほころぶ

渡部ゆき子

只見には稀なる年ぞ早くより除雪機の音聞かず夜の明く

渡部ヨリ子

年越しの蕎麦を食べ終へ孫たちは眠気半分宮参りに行く

新国 洋子

「ヨウコバア九十一サイオメデトウ」曾孫二人が紙吹雪まく

(出詠順)



只見俳句会

二月例会

目黒十一

指導

信

下校時の声華やぎて山笑う
青空に突き刺す如く梅一輪

大根鍋ストーブにまかせ孫話し
家々の正月飾りどんどの火

都

独り居の句集見入るや寒の雨
宿題を詰め込み学校始めかな

明日を待つ妻と二人の大晦日
風花や覚悟固める峠越え

味代子

吉児

窓に付く雪の結晶見て飽かず
冬の朝コーヒー香る二階迄

蕎麦搔は妣の一芸しのぼるる
初雪や越後山脈耀ける

弘子

幸生

冬ごもり爺の手が生むつる細工
冬茜うす衣を背に白き尾根

流し場の熱き露天や雪の宿
雪割れば女日芝の青陽に嗤う

礼

雪晴やスキップの子に先越さる
春寒や母の齢に重ねては

